私たちはすでに出会っているのだろうか? それぞれの物語は語り合えたのだろうか? そして、互いに恋に落ちるのだろうか?
プージャ・スード

ところで、私たちは以前、出会ったことがある?

アデ：うん。ぼくたちは出会った、やっと……。
晴子：そうね、私たちは出会えた。けれどもこれが終わりではない。同じ人と再び出会うことも、そして何度でも出会うことが可能だと思うから。
プラープダー：ぼくたちは出会えたわけだ。しかし問題は、これからお互いの物語を語り合い、そして恋に落ちることができるのか、ということだよ。

たぶん、そこから始めないといけないだろう。物語を語ること、そして次第に――恋に落ちるかもしれないことを期待して。それはおそらく長い関係のはじめの一歩――関係を望むことが前提ではあるが。どのような作品にも、どのような芸術的な感覚にもそれぞれに物語があって、展覧会とその準備はそのためのほんのはじまり。

*

やぁ!

アデ・ダルマワン（男性）
1974年、インドネシアのジャカルタに生まれる。オルタナティヴ・スペース「ルアンルパ（ruangrupa）」代表。アーティスト、キュレイター。ジャカルタ在住。

河野晴子（女性）
1970年、東京に生まれる。資生堂ギャラリー学芸員。東京在住。

プージャ・スード（女性）
インドのプネーに生まれる。非営利活動法人「コージ（KHOJ）」代表。インディペンデント・キュレイター。ニューデリー在住。

プラープダー・ユン（男性）
1973年、タイのバンコクに生まれる。作家、評論家、映画脚本家、写真家、デザイナー、雑誌編集者。バンコク在住。

*

プラープダー：ぼくたちが泊まっていた赤坂のホテルのカフェでアデとプージャを見つけた時のことを覚えているよ。朝食の時で、アデはもうタバコを吸っていたから、自分の習慣に没頭するタイプだと見たね。
晴子：面白いグループ……。でも、その中に自分がどう溶け込めるのかがわからなかった。そして同時に、学生時代に戻ったような感覚にもなった。インターナショナルスクールに通っていたから。
アデ：とても興味深い組み合わせだと思った。個人的には展覧会だけじゃなくて、他のこともっと一緒にやるべきだと思う。

私は一番年上で、年齢差を感じた。それぞれ全く違うタイプの人のようにも思えた。全員がキュレイターではなかったし。ひとりは作家、ひとりはアーティストでありキュレイター、そして残り二人がキュレイター。果たして同じ言語で「話し合える」のだろうか?
複数のキュレイターが一緒に仕事するだけでも難しいのに、どうやったらうまくやっていけるのだろうかと考えたことを覚えている。キュレイターの証はどうなるのか? 展覧会の責任は誰が取るのか?

興味はある?

―東京に全員集まった時、このプロジェクトはうまくいくと思った?

プラープダー：どうして、これらの国がひとつのグループになったのかに少し混乱していたけれど、面白い展覧会になると思った。
晴子：全然。私は挨拶にでも行けばいいという気持ちで行ったのに、その時の2日間がみんなの唯一の東京滞在の日程だと知って……おまけに展覧会の日本の作品はどうするの?? とあなたに聞かれて、何がなんだかわからなくなってしまった。まずい、どうしたらいいんだろう! と思ったのを覚えている。
アデ：実のところ、ぼくはこの組み合わせとみんなに出会えたことにかなり興奮したんだ。この先に展覧会があるということは考えなかった。というか、何でもあり得た。出会って、話をして、スタバでコーヒーを飲むだけでも（!!）……もちろん、はじめは誰でも不安さ。でもそれなりに対処するわけで……。ぼくはこの不確実な感覚をいつも楽しむ方なんだ。だって、可能性とリスクという2つの相反するものに向かって結果はオープンにできるということだから。

最初は私も結構わくわくしていた。でもそのうちに警戒心が芽生えてきた。典型的な日本型の協働/共感の仕事の運び方を見て疑念が沸いてきた。この時がお互いの初めての顔合わせだった

し、展覧会は9ヵ月先だとはいえ、実際に一緒にいるのはたったの10日間だけ！ 一体、どうやったら作品を一緒に決めていくことができるのか？ 感覚も視点も異なる私たちが……。

一緒に食事をしながら、天気の話をしながら、作品を見ながら、東京中を疲れ果てた足取りで一緒に歩き回っている時も、私はとても些細なことに対することでもそれぞれの人のコメントを敏感に意識していた……。でも同時にイライラもしていた……。時間が足りない、もっとアートについて話すべきだと思っていたから……。

今、その時のことを思い返してみると――それは、長い関係のほんのはじまりだった。当時は、お互いの周辺を音をたてないように爪先立ちになって歩いている感じで――お互いに気遣い、どんな感じの人なのか把握しようとしていて……それは後でお互いに傷つけずに議論し、嘘をつかずに交渉ができるような信頼を築き上げるための直感的なプロセスだった。

*

―コラボレーションというものをどのように解釈する？

ブラープダー：友情、共犯、家族、そして健全な成果物。
晴子：私は、必ずしもメンバーそれぞれが同等のインプットを提供することがコラボレーションになるとは考えていない。それは協力であって、協働ではない。多分、コラボレーションとは、自分にしか提供できないものを提供するしかないんだと思う。そして、それが誰かの琴線に触れるかどうか様子を見る。つまり、コラボレーションは化学反応みたいなもので、ある時は成功するし、ある時は成功しないけれども、やってみないとわからない。
アデ：みんなが何かを共有しようとしている時、そして、何かを貢献しようとする時は同時に何かを失う。真の水平型のパートナーシップ。実際に起ることやどんな結末になるのかがコントロールされているわけではないと思う。

インターネットで「コラボレーション」という言葉を引いてみたところ、次のような定義を見つけた。

1）「特に知的な行為に関して、他の人と共同で、あるいは一緒に仕事をすること」。

なるほど。でも財布の紐を握るのは誰だろう？ 現実におけるコラボレーションでは、経済的コントロールについても同等の権利を持っていないと……資源を共有して、他の誰かに強制されないことが必要。

2）「コラボレーションに基づく学習は物事の意味を定義するプロセスの共有を通じて実現されるため……意味の性質と意味を決めていく社会的な行為に関心がなければならない。哲学的な分析によると、意味は必然的に共有され、文化や状況における言語的な、そして物質的な所産の中に継承される。しかし、意味は個人によって解釈されなければならない。共有された意味と個人の解釈との間には流動的な関係が生じる。コラボレーションに基づいた活動に関わるには、所産の意味を認知し、その意味を個別の視点から解釈する必要がある。意味と解釈との相互の関わり合いには意味合いが……」

私たちは、共に何かを学ぶことができたのか？ そもそも学んでいるという意識はあったのか？

ようこそ！

―アイデンティティとか、アジアなどのポジションに関して、ポリティカリー・コレクト（政治的公正）な専門用語を知りながらも、お互いの国についてステレオタイプ化した感覚を持っていたと思う？

ブラープダー：もちろん。ステレオタイプ化は避けられない。
晴子：私は今でも持っていると思う。でもそれは何かに出会った時の入口に過ぎない。その概念をいかにひとつひとつ剥ぎ取っていくかによって、やっと何かを理解することができるのではないかな。
アデ：お互いにステレオタイプ的感覚はいつも持っているんじゃないかな……でも何もないよりはいい。つまり、いつだって相手を認識する時には何か取っ掛かりが必要だということ……もっと知ることによってそれはすぐに変わっていくものだと思う。

アジアに住んでいる私たちでさえ、アジアという言葉はエキゾチックな匂いがぷんぷんしている。最初はのぼせるほど夢中になるけれど、しばらく経つとその印象も色褪せてくる。（調査の時に）各自が自分の国の案内役を務めたのはよかったと思う。そうでなければ、アートシーンを3日間きりでむさぼるように消費する「インタ

ーナショナル・ツーリスト・キュレイター」のレッテルを即座に貼られてしまう。

デリーでインターナショナル・キュレイターを受け入れる側に立っている時に、現実的に私たちの「調査」の限界がとても気になった。

＊

—話し合いのどの時点で典型的な重い/暗いアジアの展覧会をやめて、自由でオープンで「軽やかな」展覧会にしようということにみんなで決めたんだと思う?

プラープダー：ぼくが思うに、4つの国は政治的にひとつのものの見方を共有していないし、アーティストに至っては、同質の葛藤を共有していないから、政治的な表明をする展覧会にすると大失敗すると全員で合意した時じゃないかな。それに、自分たちが持っているアジアの美術に対するステレオタイプ化された見方を克服したかったのだと思う。
晴子：私は、最初からそういう考えを持っていた。私たち日本の観客が90年代半ばから後半にかけて、一連の「アジア美術」展を観るようになって以来、重くのしかかってくるアジアのイメージを個人的には負担に感じていたから。私にとって、それはどこか「外」のものだった。自分がそこに属しているという感覚を持つこともなかったから、自分の中でアジアに対する無知と無関心が広がっていったわけ。アジア＝重厚で、ホットで、スパイシーなイメージを与えた展覧会のタイトルを全部挙げることもできる……確かに私は当初からこのイメージをひっくり返してみたいと考えていたけれども、それが十分に成功したとは言えない。この「軽やかさ」を実現することにまじめに取り組み過ぎてしまって、何を提示すればいいのかということを考えるよりも、何をひっくり返せばいいのかということばかりに気を取られていたことがひとつの問題というか間違いだったと思う。
アデ：ぼくたちが「Have We Met?」という言葉を発見した、まさにその時。

これについてはずいぶん議論した……驚いたことに私はどちらの立場もよく理解できた。アジアの美術が暗くて堅苦しいものに代表されるという見解には、インドの美術について同様の批判を聞いていたので明確に理解していた（これについては時に私も合意する）。しかし、意識的にこのタイプの作品を候補から外すことについては、とても居心地が悪かった。そんなに簡単に一般化していいのだろうか? 葛藤や社会政治的な視点が反映された作品ていう

だからというだけで無視したり、その上、類型化まで許してしまっていいのだろうか? アデと私は同じ心情を共有していた。当然のことながら、ジャカルタで見た作品にはある種の仲間意識を感じた。タイのアーティストについては、過剰と言ってよい程のテクノロジーの利用、ユーモアの感覚、独特の奇抜さに、世代的ギャップを感じた。日本については調査期間が短か過ぎて、印象はぼんやりとしている……。

全然進まない——一息入れよう

プージャへ、

このプロジェクトをやっていて難しく感じる背景には、6月以来議論する時間が十分に取れていないことがあると思う。メールは便利だけど、コラボレーションに最適なツールではないから。東京での展示を考えるのは、必然的にこのプロジェクトにおける私の役割なのはいいとして、展覧会のアイデアについて考えるチャンスがないことが少し心配。でも、選んだ作品は確かに気に入っているし、エキゾチックなアジアというディスコース全般から解放されるようなある種の軽やかさや新しさを提示していると思う。
そろそろこういうアジアの展覧会をやるべき時期だと、私は思うし……。

晴子より

締め切り。決まった予算。限られた調査。限られた時間。知り合う時間も限られている。その結果、展覧会も限られたものになってしまうのだろうか? おそらく私はシニカルになり過ぎていたのかもしれない。見方を変えれば、どんなプロジェクトだってこういうものではないか? 何事にも限界はつきもの——最も野心的なプロジェクトでさえも。

洗いざらい話し合おう

—メールを介して仕事することに満足できた? これが新しい仕事のやり方だと思う?

ブラーブダー：うまくいったと思うけれど、満足だったと言い切れるほどではない。ぼくは、もっと密な関係のコラボレーションが好きだから。

晴子：メールではコラボレーションは実現しないものだと思う。どこかで読んだことがあるけれど、（文章になった）インタビューの最大の問題は、沈黙を文字にすることができないことだって書いてあったの。メールもこれに似ていると思う。考えをやりとりできるという意味ではライブな感覚が生きている。でも、行間に込められた考え/ニュアンス/気持ちを全て理解することはできない、どちらかというと……自分が発している言葉に対して相手がどのように反応しているのかがわからないから、メールにはスピード感がある一方で、こういうコミュニケーションの方法には時間差が必然的に生じてしまうんだと思う。もちろん、メールは新しい仕事のやり方だから、ファックスや電話しかなかった頃に戻ることはできないけれど、だからといって、私にとってはこれが新しいコラボレーションの方法だとは思えない。

アデ：ぼくたちがインターネットを「メディア」として、うまくコントロールして使っているとはぼくには思えない。未だにぼくたちは消費者として利用しているだけだよ。目の前にあって、みんなが使っているから、ぼくも使わないといけなくなる。新しい仕事の方法のモデルに到達したわけではない。

私は、建築的な設計図は読み取れない。長い詳しいメールを書くのは嫌いだし。自分らしく表現できるのは会話をする時。メールがそれに代わるものにはならないし、代わりではない。でも不思議なことに、こういう状況の中にあっても仕事をかなり進めることができた。詳しい図面やイメージ（かなりすごい3Dのもの）を相互に送ることができたので、視覚的な感覚は損なわれることはなかったし……それに実際のところ、すぐに返事をしなくていい分、ゆっくりと考える時間も取れた……時には返事しないこともあったし……。ということはうまくいったということなのかな——制約があるにも関わらず——ある広がりを持って。

*

プージャへ、

キランのインスタレーションについて問い合わせていたでしょう? ディナー・テーブルのインスタレーションはいいと思う。心配なのは、アングンの《Sexy Bear》とクリシナラージのインスタレーションがすでに居間のような雰囲気を醸し出しているということ。イケア家具店のような展覧会にならないかな?!……それと、これらの作品を大きな展示室のどこに展示する? どこに何を展示するのか、私たちそろそろ本当に考え始めないと。

晴子より

心配だ。決まった作品はどれもいい……魅力のある内容だし、もちろん、最終決定した時に互いの作品が共鳴し合うことも確認できたし、一緒に展示をしてカッコいいと思う。一方で全体的にフォルム的性質がとても強い作品が多いから、単純に「美しいオブジェ」を見せる展覧会に見えてしまう危険性を孕んでいる。作品のコンテクストもちゃんと見えてくるのか? コンテクストをいかにして伝えるかについてもっと集中する必要があるのではないか? 「軽やかさ」を強調し過ぎていないのか?

晴子：今回選んだ作家たちには、微妙だけど、だからこそ面白くて、もちろん、偶発的な接点を見出すことができると思う。名和とクリシナラージは二人とも「表面」について語っていて、フィニッシュは驚くほどクオリティが高くて、それなのに単に「美しいオブジェ」に留まらない。クリシナラージは作品の「皮膜」——偽物の真珠の皮膜——は実際に隠蔽するものは何もない、というより、何も露呈させるものがないと言っている。名和の作るものは立体感と空虚感が同居している。私たちの目の前にあるものは何だろう? どれだけ奥を見据えればいいのか? そもそも、どうしてこういう疑問が湧くのだろうか?

*

みんなへ、

さて、やっと……シギットと随分議論をした結果、いろいろなアイデアが出てきた。彼は今、海外に出稼ぎに行っているインドネシア人労働者の問題について熱心に取り組んでいる。彼のアイデアはこうだ：

出稼ぎ労働者は、（出身地は）インドネシアの中でも自然資源に恵まれているのに、巨大産業に管理されて搾取される工業と経済の中心になっている地域の出身者。中央集権化されて社会的格差が生じてしまったので、彼らのように——運のない人は——故郷を離れて、将来性があってあらゆる種類の仕事がある都市へと向かう。

彼らは家族のヒーローで、新しい建物をたてて町を美化して、きれいな洋服とすばらしいアートをもたらす。日本の工場や都会の街頭でこういう人を見かけるかもしれないね。

この作品は、彼らの故郷と全く同じように、きらびやかなパーティと官能的な音楽で、悲しみや消失をも祝福できる彼らの成功の物語と勝利を感じさせるだろう。

形態：エンターテインメント/祝祭的な場所——音楽、照明など。小さなギャラリーにはインドネシア人の出稼ぎ労働者の故郷にある娯楽施設での行動やお祝いの場面の写真、絵画、ビデオを展示。作家は、展覧会を見にくる来場者に、故郷でのお祝い事の写真や、単なるお祝いの写真を持ってきてもらうようにお願いして、これをコピーする——そう、だから、いいカラーコピー機が必要。

ではね。

アデより

シギットのプロジェクトには全面的に共感できる。よりよい将来を求めて出稼ぎをするという、インドやこの地域の現在進行形の現象に強く共鳴するから。彼に展覧会のための作品を委嘱することにしたのも、まさに彼の仕事に対するこの態度を理解したからだ……でも私はプロジェクト/プロセスがベースになっている作品を「見せる」のに戸惑いを感じる……単なる記録の展示でいいのだろうか？「経験」することが最も重要だと考える作品で、プロセスが観る人にもわかるようにするにはどうしたらいいのか？ 視覚的な形へとどのように置き換えればいいのか？

シギットが昨年、コージのワークショップで作った作品はすごくよかったけれど、強烈な経験に基づいた感覚を伴っていた。今回のプロジェクトは「聞こえ」はいいけれど——本当に「うまくいく」のだろうか？ 私はパーティに関しては積極的に賛成できない。こういう祝祭って、どんなお祝いでもいいわけだから——パーティをする意味って何なの？ 彼は、いわゆる「エッジ」の効いたものを作り出すことができるのだろうか？

晴子：プロジェクト・ベースの作品は記録だけではわかりにくいというあなたの言っていることには同感。でも、だからといって、プロセスに没頭しないと、作品を理解する「資格」がないとは言えないと思う。

シギットについて。過去の作品では、将来、自分と日本人のガールフレンドとの間にできるであろう子供の顔に似た日本人の子供を捜したり、行き先を言わずにリキシャに乗りたい人を誘って、バンガロールの静かな墓地に行ったり。言語的な介入をほとんどせずに、単純な行為を通して、参加者自身が自分の状況や普段はその良さがわからないような場所について考えるきっかけを作っている。たぶん、シギット自身は将来生まれてくるであろう子供に出会うというドラマチックな経験をする必要はなく、乗客も墓地で静かに考える必要はなかったのかもしれない。彼の作品はどこかに向かっているという感覚、自分たちがどういうことをするのだろうと思いを馳せることや、移ろいや儚さというアイデアそのものに美しさがあるのかも。

だから、私は、観客がパーティの意味がつかめないこととか、そこに参加しないから経験できないということについてはあまり心配していないの。エンドレスなパーティはいずれにしろ疲れるし、面白くない。宴の後にも、ある種の美しさがあるんじゃない？ 床に散らばった紙吹雪、空のワインボトル、楽しい時間の余韻……そういうのは好き。だから、どうなるか様子を見てみたいと思う。

私たちはここからどこに向かうのか？

この物語を語りながら、展覧会の「プロセス」、つまり「メイキング（準備）」についてじっくり考えてみたけれど、晴子がコメントしたように、プロセスに没頭しないと理解する資格がないわけではないのかもしれない。楽しむ資格についても同じかもしれない。たぶん彼女は正しい。

どちらにせよ、そう、あなたは恋に落ちるかもしれないし……。

プージャ・スード（インディペンデント・キュレイター／「コージ」代表、インド）
アデ・ダルマワン、河野晴子、プラープダー・ユンとのコラボレーション

（帆足亜紀訳）

Have We Met? Have We Told Our Stories? Will We Fall in Love?

Pooja Sood

So, have we met before?

Ade: Yes, we finally met...
Haruko: Yes we have met, but that's not the end of it. I think you can meet someone all over again, many times over.
Prabda: We have met. The question is will we exchange stories, will we fall in love?

Perhaps that's where I have to begin: to tell the stories, in the hope that eventually — we may fall in love. It's probably the first step in a long relationship — if one wants one. Each artwork, each artistic sensibility has its own story to tell, and the exhibition and the making of it is just the beginning.

*

Hey!

Ade Darmawan (Mr)

Born in Jakarta, Indonesia in 1974. Director of alternative space, ruangrupa. Artist and curator. Lives and works in Jakarta.

Kohno Haruko (Ms)

Born in Tokyo, Japan in 1970. Curator of Shiseido Gallery. Lives and works in Tokyo.

Pooja Sood (Ms)

Born in Pune, India. Director of KHOJ International Artists Workshop. Independent Curator. Lives and works in New Delhi.

Prabda Yoon (Mr)

Born in Bangkok, Thailand in 1973. Writer, critic, film writer, photographer, designer, and magazine editor. Lives and works in Bangkok.

*

Prabda: I remember spotting Ade and Pooja in the café of the hotel we stayed at in Akasaka. It was breakfast time and Ade was already smoking, which shows how devoted he is to his habits.

Haruko: Interesting group...wasn't quite sure how I would fit in but it was also like going to back to school because I went to an international school.
Ade: Very interesting combination, personally I think that we should do more than just an exhibition.

I was the eldest and I felt my age. We seemed so different. We weren't all curators. One writer, one artist/curator, 2 curators. Would we "talk" the same language?
I remember thinking, it's bad enough when one has curators working together...how is this going to work? What happens to the mark of the curator? Who ends up being responsible for the exhibition?

Interested?

Did you think this project would work when we all met in Tokyo?

Prabda: I thought the show would be interesting even though I was a bit confused as to why our countries were grouped together.
Haruko: No, I got kind of lost when I found out that these were your only 2 days in Tokyo and I was just told to come in and say hi...and you said what's gonna happen to the Japanese leg of this exhibition?? and I thought, oh no, what am I supposed to do!
Ade: In fact I was quite excited with the mix and to meet you all. I didn't really think that it would be an exhibition, I mean it could have been anything...may be we just meet and talk, drink at Starbucks...(!!)...there is uncertainty in the beginning of course, and we deal with it...but I always enjoy this uncertainty, because that means its very open ended with two extremes — of possibilities and risks...

Initially I was quite excited. But soon I began to feel wary. I began to question what I saw as a typically Japanese collaboration/consensual way of working. It was our first introduction and although the exhibition was 9 months away, we had only 10 days together! How could we possibly decide on artworks together? We had different sensibilities/perceptions...

As we trudged all over Tokyo together — eating, discussing the weather, looking at art, I was acutely aware of each persons comments on the most trivial matter... But I was also impatient...kept feeling that there wasn't enough time and that we should be talking more art..!

In retrospect — it was just the beginning of a longer relationship. We were tip toeing around each other — all trying to get a feel of each other...it was an intuitive process of establishing trust...so that later we could argue without hurting, negotiate without lying.

*

What's your interpretation of collaboration?

Prabda: Friendship, partnership in crime, family, and healthy offspring.
Haruko: My interpretation of collaboration is not necessarily about each giving in the same amount of input. That's cooperation, not collaboration. I guess it's to give in what you can and only what you can and to see if any of that strikes a chord in somebody else. I guess collaboration is kind of like chemistry, sometimes it happens and sometimes it doesn't but you don't know until you try. but
Ade: When everyone is willing to share, to contribute but at the same time ready to lose something. It should be a real horizontal level partnership. There is no certain control over what really happens or what will end up.

I looked up the internet and came across the following definitions of the term "collaboration."

1) "To work jointly with others or together especially in an intellectual endeavor."

True. But who holds the purse strings? Because in actuality people really collaborate when they are all equally in control of the economics as well...they share the resources and it is not dictated by elsewhere.

2) "Because collaborative learning takes place through processes of shared meaning-making...must be concerned with the nature of meaning and social meaning-making practices. Philosophic analysis suggests that meanings are necessarily shared; they persist in linguistic and physical artifacts in our culture and situation. However, these meanings must be interpreted by individuals. There is a dynamic relationship between shared meanings and individual interpretations: In order to engage in collaborative activities, people must come to recognize meanings of artifacts, and interpret these meanings from their own perspectives. The interplay between meaning and interpretation has implications..."

Did we jointly learn? Were we aware that we were learning?

Come on over!

Do you think we had stereotypical notions of each others countries despite knowing all the politically correct jargon about this position? Identity/Asia etc.

Prabda: Sure. I think stereotyping is inevitable.
Haruko: I do, I still do. But that's an entry point to anything. It's how you rid yourself of these notions one by one that you finally get to know something.
Ade: I think we always have stereotypical notions of each other...but that's better than nothing, I mean we always need something to identify...which could change very quickly when we know more.

Even for all of us who live in Asia, the term reeks of exotica. A heady infatuation to begin with, it's only after a while that it begins to pale. It was good that each one of us was the local guide in each place, as it's so easy to be labeled an "International Tourist Curator" — voraciously consuming the art scene in 3 days flat!

Being at the receiving end with visiting international curators in Delhi, I was acutely aware of the limitations of our "research"...

*

When in our discussions do you think we arrived at the

decision to do away with the stereotypical notion of Asian art as heavy/dark show and have one that was free and open and "light"?

Prabda: For me, I think that decision came when we agreed it would be a disaster to try to shape the show into a kind of political expression, since the 4 countries don't share one solid political view and certainly the artists from each country do not share the same sense of struggle. Plus I think we wanted to overcome the stereotypical views about Asian art that even we ourselves had.

Haruko: For me, from the onset. I have been burdened with this heavy Asian image ever since we (the Japanese audience) began to see an influx of "Asian art" shows from mid to late 1990s. It came as something "foreign" to me. Hence, I never felt I belonged there, and hence my ignorance and indifference to Asia grew. I can name all the shows that fed me this Asia = heavy, hot & spicy image...I do admit that I set out to try and overturn this image, but I don't think I've been able to do that well enough. The one problem/mistake that I made is that while aiming to achieve this "lightness" is that I took it too seriously and thought too much of what I had to overturn as opposed to what I myself could bring to light.

Ade: When we found the term "Have We Met?"...

This is something we argued a lot about... Surprisingly I was on both sides. I understood clearly what was being said about Asian art been typified as dark and somber, as I have often heard this criticism from several people about Indian art (sometimes I tend to agree); But when it came to consciously dropping this kind of work, I felt very uncomfortable. How could we make these generalizations? If there is a sense of struggle or socio-political comment reflected in the art, how can it be ignored or worse still typified? Ade and I echoed the same sentiment. Not surprising then that I sensed a certain kinship in the artwork in Jakarta. The Thai artists we were introduced to left me feeling a generation apart with the almost over use of technology, their sense of humour, a certain quirkiness in the work. The Japanese scene was too short and a blur...

*

This isn't going anywhere — let's give it a break

Dear Pooja,

I think the difficulty with this project is that we haven't had ample discussion after June.
Email is great but it's not the perfect tool to collaborate with...
Doing the installation on the Tokyo side is the inevitable part of my role in this project, so it's ok...
I'm a bit worried about not being able to think about the idea of the show. But then again, I do like the works we've come up with and they do somehow communicate a sense of lightness and newness that liberates us from this whole discourse about Asia as the exotic.
It's about time we came up with an Asian show as such, I think...

best regards,
Haruko

Deadlines. Fixed budgets. Limited research. Limited time. Limited knowing each other. Would this result in a limited show? Perhaps I was being too cynical. On the flip side, isn't this the way all projects function? Everything has limitations — even the most ambitious projects.

Let's talk things through

Do you think working via email was satisfactory? Will this be the new mode of working?

Prabda: It has been fine, but I wouldn't go as far as to calling it satisfactory. I would prefer a closer kind collaboration.

Haruko: Collaborations simply don't happen over email. I read somewhere that one big problem with (written) interviews is that you can't transcribe silences, email is kind of the like the same, it's live in the sense that you can ping pong ideas back and forth, but you can't understand all the other ideas/nuances/feelings in between the words, so to say...you don't know how the other person is reacting to what you say as you say it, so although email is a speedy medium, the flipside of

it is that there is an inevitable time lag caused in this sort of communication. Email of course is the new mode of working. We can't go back to faxes and phone calls, but for me it's not the mode for collaborating.

Ade: I don't think we are using the internet in a very controlled way as "media," we still use it as consumers. Because it's in my face and everybody uses it so I have to use it as well ...I don't think we've reached a new model of working yet...

I can't read architectural plans. I hate writing long descriptive emails. I express myself best in conversation. Email cannot and is not a substitute for any of this. But strangely despite this, we got a lot done. Our sense of the visual remained intact, as we could send out really detailed maps and visuals to each other (quite amazing the 3D ones)...And actually, not having to respond immediately gave one time to think about things at leisure... sometimes not answer...so maybe it worked — despite its limitations — in an extended kind of way.

So maybe virtual galleries on the web have a point? I had always felt that unless one saw things "in the flesh," it wasn't worth it.

*

Dear Pooja,

I think you asked us about Kiran's installation.
The dinner table installation sounds good. My only reservation would be that Anggun's *Sexy Bear* and Krishnaraj's installation already have this living room feel to it.
Will we have an Ikea look to the exhibition...?!
That said, I wonder if you have an idea of where to bring these works in the large room? We really have to start thinking on where to put what.

best regards,
Haruko

I'm worried. The work we've decided on is good...each piece has an engaging quality and of course we saw resonances when we finalized the selection. I'm sure it will look good together. Overall a lot of the work has a very strong formal character...There's a danger of the exhibition being seen as a show of just "beautiful objects." Will the context of the work emerge? Shouldn't we focus more on how to convey context? Are we overdoing the "lightness" a bit?

Haruko: I think there are subtle, yet interesting, and of course coincidental points of tangency between the artists we have chosen. Nawa and Krishnaraj both talk about the "surface" of things. Both artists are quite amazing for their finishing quality and yet they're not just "beautiful objects" contained in themselves. Krishnaraj says that the "skin" of his work — the membrane of fake pearls — actually doesn't have anything to conceal, rather, it has nothing to reveal. Nawa's objects are simultaneously about solidity and hollowness. What are we seeing? How deep do we look into things? Why are we coming to these questions anyways?

*

Dear all,

Finally...after discussing lots of things with Sigit, he came up with different ideas, now he is intensively working with the issue of Indonesian workers who work abroad. His idea is:

The workers come from an area in Indonesia which is in fact very rich with natural resources, but managed and sucked up by big industries and brought to the centre of industry and economy. This caused centralization which triggered social disparity. All this is the reason why they — who don't have luck — go from their hometown to the city, which is more promising because there is a diversity of jobs.

They are the heros of their family, who build and beautify the city with buildings, beautiful dress and spectacular art. You might see these people in factories or on the city streets of Japan.

This work will give the feeling of winning and their

successful story from the people who could also celebrate their sadness and losing with a sparkling party and sensual music just like in their hometown.

Form: entertainment/celebration place — with music, lights etc., also as a small gallery it will show photos, paintings and videos of the celebration and the activities in the entertainment place from the Indonesian migrant workers' hometown. Sigit will ask people to come and bring their photos from the celebration that people have had in their hometown or just some photo from a celebration party. These photos will be photocopied — so we need a nice color photocopy machine...

cheers,
Ade

I empathize with Sigit's project completely as it has strong resonances in India and elsewhere in the region where migration for better prospects is an ongoing phenomena. Our decision to commission a work by him for the exhibition was based on just this understanding of his manner of working...But I have a problem with the "showing" of project/process based work in general...is the mere documentation of it adequate? How do you make the process accessible to a viewer who hasn't been part of it specially since the "experiencing" of the work is so essential? How do you translate it into a visual form?

Sigit's work at the KHOJ workshop last year was amazing but it had a strong experiential feel to it. This project *sounds* good — but will it *work*? I'm a bit reluctant when it becomes a party. A celebration of this kind could be any celebration — what's the point of a party?...will he be able to create that "edge" ?

Haruko: I agree with your point that something can get lost when one only sees documentation of a project-based work. But I don't think that one needs to be immersed in the process to be "qualified" to understand it.

About Sigit. In the past, he went out to search for Japanese children who he thought would resemble his future children between him and his Japanese girlfriend or invited people to ride a rickshaw bound for an undisclosed destination, which ended up to be a quiet cemetery in Bangalore. With hardly any verbal intervention, his simple actions let people reflect on themselves and places which wouldn't have been appreciated otherwise. Maybe Sigit didn't need to experience the drama of meeting his future offsprings, maybe his guests didn't need to reach the cemetery and reflect in solemn silence; maybe his work has beauty just in this idea of getting somewhere, of wondering what we're bound to do, this very idea of transience or ephemerality.

So, I wouldn't worry too much about people "not getting" a party or people missing it by not being there. An endless party would be a drag anyways, not fun. And a party can hold a certain kind of beauty when it's over too, can't it? Confetti on the floor, empty wine bottles, remnants of happy moments ...I like all that. Let's just see what happens.

Where do we go from here?

In the telling of this story, I've been engaged with the "process," the "making" of the exhibition; and as Haruko above remarks, perhaps one doesn't have to be immersed in the process to be qualified to understand it, even to enjoy it. Perhaps she's right.

Maybe you'll fall in love anyway...

Pooja Sood (Independent Curator / Director, KHOJ, India)

in collaboration with
Ade Darmawan, Kohno Haruko, and Prabda Yoon